

女子学生における慣用色名とその色域について

文化女大家政 ○盛田真千子 香川幸子 共立女大家政 杉田洋子 山陽  
学園短大 江口玲子 山梨大教育 矢崎浄子 共立女大家政 小林茂雄

目的 色の表示，伝達方法は多くあるが，その中で慣用色名は色を表す方法として，古代から使われ，そして今日も，色の伝達や商品のイメージアップの手段として，盛んに使われている。しかしその半面，色名だけでどんな色みであるか正確に伝えるということは問題がある。また時代の変遷によって，色名と色みが結びつかなくなったり，色名が同じであっても，生活が変化する中で色みも変わるのではないか，そこで現代の女子学生が，慣用色名に対し，どのような認識をしているか，その色域について調査した。

方法 文化女子大学生，山陽学園短大生（18～20才）293名を対象に質問紙により1988年10月にアンケート調査を行なった。その際，光源はC光源に近くなるよう配慮した。JIS Z 8102より抽出した105語の慣用色名に対し，該当する色をカラー4ロート（154色，P.C.C.S.色相トーン一覧表）から選出する方法で，各色名の反応色域をそれぞれ求め，JIS値との比較を行い考察した。

結果 朱色，柿色，れんが色，肌色，だいだい，茶色，みかん色，ひまわり，クリーム色，レモン色，ワインレット，墨はJIS値に近い色域で顕著に反応した。それに対し，からし色，まっ茶色，草色，藍色，なす紺はJIS値よりやや高彩度の色域に高い反応を示した。また，薊芳，代赭，新橋色，あさぎ，納戸色，シアン，縹色，鳩羽色，モーブ，マゼンタ，鶉色は80%以上の被験者が，具体的に色をあげることはできなかった。以上の結果から，各色名の反応色域はJIS値よりやや高彩度傾向の色名があらわれ，低彩度傾向は少なかった。また，伝統色名などの認識は女子大生にとって難しいものとなっている。